

ブルキナファソとの断交から一夜、 外交部長が政治大学で講演

5月24日、西アフリカに位置するブルキナファソは台湾との国交断絶を宣言した。これを受けて、中華民国政府はブルキナファソとの外交関係を終了し、大使館の撤退や援助計画の停止などを決定した。同日夜には呉釗燮外交部長が国際記者会見を開き、5月1日のドミニカ共和国との断交を含めて1カ月のうちに2つの国と断交した責任を取るため、口頭で蔡英文総統に辞意を伝えたことを明らかにした。

ブルキナファソとの断交及び辞意表明から一夜が経った25日、呉部長は母校である国立政治大学（台北市）で講演を行った。呉部長は冒頭、「外交部長は来るのか」、「現部長か前部長のいずれの身分で来るのか」など学生から心配の声が上がっていたことを教員から聞いたことに触れ、「私は依然として外交部長です」と断言した。また蔡総統から外交成果が悪くないことから「辞任の必要はない」と慰留され、「引き続き我が国の外交のため奮闘する」と自身の続投を明らかにした。

会場に想像以上の多くの聴衆が駆けつけたことに対し、「昨日、中国政府が私のために広告を打ってくれた。中国

政府に感謝します」とジョークを言う余裕も見せて会場を沸かせた。

約1時間の講演のなかで、呉部長はWHO総会への参加が拒否された問題などに言及しながら台湾外交の特殊性、困難を指摘し、自身の駐米代表などの経験を交えながら、台湾の外交官一人ひとりが台湾の外交空間の拡大のために闘っていることを強調した。また中台関係について、自身の考えは対中政策を主管する大陸委員会主任の際に形成されたとし、中台関係が悪化している時こそ主要な民主主義国家との関係強化を促進すべきという考えは現在に至るまで変わらないと語った。

大陸委員会主任の際には1年で複数回、アメリカや日本などを訪れ、関係者や機関と積極的に交流し、民主主義国の台湾への支持と理解を取り付けていたという。最近の中国による台湾への圧力については、統一のための圧力が却って双方の距離を遠ざけているとの認識を示し、「この傷は一生癒えないだろう」と中国政府のやり方を批判して、圧力には屈しない決意を語った。

呉部長は、かつて陳水扁政権下で総統府副秘書長、行政院大陸委員会主任

を歴任し、初の民進党籍駐米代表も務めた。また2014年には蔡英文民進党主席のもとで民進党秘書長として支え、そして2016年5月20日に蔡英文政権が発足してからは国家安全会議秘書長、総統府秘書長を経て、今年2月26日に外交部長に就任した。まさに蔡英文総統の右腕的存在である。

5月11日には外交部内に新たに「インド太平洋科」を設置した。これは東南アジア諸国との関係強化を目指す蔡英文政権の「新南向政策」と、アメリカ、日本、オーストラリアなどの国々が提唱する「自由で開かれたインド太平洋戦略」を結びつけ、積極的に連携していくことを目的としている。

現下の台湾外交は中国の圧力による相次ぐ断交と国際機関への参加妨害によって危機に直面していることは間違いない。その突破口として、日米をはじめとする民主主義国家との連携を促進して活路を見いだせるか、台湾外交の舵取り役としての呉釗燮外交部長の手腕が今後も注目されそうだ。



母校の政治大学で講演する呉外交部長